

本学図書館の個性化に向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 総一郎, 戸沢, 充則 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15999

対 談

戸沢充則*

後藤総一郎§

本学図書館の

個性化に向けて



後藤 きょうは、私の1年半ぐらい図書館長を務めさせていただいた印象と、何とか本学の図書館を個性化して充実したいという思いもあって、「本学図書館の個性化に向けて」というテーマでお話をさせて頂きたいと思います。個性化という中身については、既存の蔵書ストックの中に、明治大学の図書館というのは意外と地方史に関する資料が多いんです。そんなこ

*とざわ・みつのり／学長／文学部教授／考古学

§ごとう・そういちろう／図書館長／政治経済学部教授／日本政治思想史

ともあって、地方史資料とかかわりの深い考古学をやっておられる、戸沢学長とお話をしたいなど思ったわけです。

一般には、大学の図書館というのは、大学の顔だとか、大学の心臓部であるとか、大学の図書館がその大学の質を決める、というふうによく言われるのですが、果たして明治大学の図書館はそれにふさわしいかどうかという問題も、ここ1年半務めながら私なりに考えてきたのです。

1 図書館の思い出

後藤 私は、1960年代前後、これは学長と同じ頃ですが、まだ復興期であった明治大学に入って、学生時代にはあまり図書館には入らなかったのですが、大学院に入ってから、書庫へ潜るのが大変楽しみなものでした。わくわくしながら原本に触れるということで、楽しみながら書庫へ潜っていった思い出があるのです。ところが、私は日本政治思想史専攻ですから、伊藤博文の伝記だとか、右翼の関係の全集とか、そういう資料を探し求めて来るのですが、なかなかないんです。そういう意味で、明治大学の図書館には、あの時代私は絶望したという思い出があります。それで、国会図書館へ行ったり、特に上野の図書館や古本屋に通って、自分の学問を育てたという印象があるのですが、学長はどうでしたか。

戸沢 後藤さんと僕は全く同じ時代に生きてきましたから、状況は同じだろうと思います。特に僕の場合は専門が考古学という学問ですから、むしろ本を読むよりはフィールドで、遺跡で遺物を発掘し、それを分析することだったんです。戦争中は、考古学という学問はほとんど社会のおもてに出てきませんでしたから、図書館との関係で言えば、図書館に考古学の本があるということは、まったく絶望的なことではなかったかと思えます。

僕は、高校時代から考古学という学問をやっていたのですがけれども、その当時、公民館の横に図書室程度がついている地方の図書館に、一ヶ所ではなくてあっちこち歩き回って、土器や石器が出ている写真とか、そういう本を探し歩いたというくらいのことが、考古学をやっているうえで高校・大学時代に、印象に残っているものがあるという程度でしょうか。

しかし、そうはいつでも考古学も学問ですから、いろんな体系があるわけで、大学へ入るくらいになってからは、戦前から考古学をやっていた先生が持っている蔵書を借りる。かなり偉い先生にアタックして、そのおかげでそういう先生と知り合いになれたとか、そんなこともありました。

その意味で、大学の図書館で特に何か思い出になるというふうなことは、ほとんどなかったというのが実際でしょうかね。

後藤 そのへんは共通していますね。それから見ると、本学の図書館も特に1960年代から、いわゆる専教連改革で大学がクリーンになってから充実しているということがよく分かりますね。

振り返って、それでは明治大学の図書館の歴史というのはどうだったのかということ、今日の蔵書数を比べてみると、ずいぶん努力したなということがよく分かります。明治大学は慶應大学に次いで図書館がわりあい早くできているんですね。創立は明治14年ですけれども、文庫室ができたのが明治19年です。それから明治36年に「図書館」という名称に変えて今日までできているんです。ところが、大正12年の関東大震災で駿河台の校舎は全部焼けたわけです。当時数万冊の蔵書があったんですが、そのときに残された蔵書が、和書が32冊、洋書が39冊、合計71冊しか残らなかったそうです。それから今日まで200万冊近い蔵書を蓄えてきたわけですから、これは見事なものだと思います。

戸沢 その点の努力は、我が先輩の先生方を見ましても、なんでそんなに熱中して本を集めるのか、というような体験は幾つか持っています。あの先生がこういう本、この先生がああいう本、というような執念みたいな集め方をした時期が確かにありました。その意味では、いま思い出してみると、そういう先生方がいらして、それでいい本を大学へ集めるのだと。そうしたことで大学というのは、質的にも大きく変わったんだろう、成長したんだろうと、そういうように思いますね。そうした蓄積が今日に到っているということでしょうか。

2 本学図書館の現状

後藤 そういう成果の上で、今どうなのかと考えると、どうも蔵書計画にしても、あるいはいい本を選ぶ収書とか選書に対しても、形骸化しているというか、これは教員も学生もそうかもしれないけど、予算の問題もありますが、けっしてうまくいっているとは思えないのです。

図書館に6億余りの予算が年間配分されます。これは早稲田、慶應に比べて少ないということはありませんけれども、まあまあという感じはします。しかし、いわゆる研究用図書、学習用図書、逐次刊行物で、6億がほしい3・3・3で割られていってしまう。それで明治大学の図書館が誇る特別資料に当てられる予算というのは10%にも足りないんです。本学が誇るような蔵書計画がなかなかしにくい。そのうえ消費税がだんだん上がってくるということもあって、毎年2%、5%アップと図書費は財産として大学もいちおう多めにはみてくれるのですが、相殺されるとゼロ予算みたいなものなんです。

そこで、大学の蔵書を総花的でなくて、明治大学には七学部がありますけれども、それに見合った形でいい図書を体系的に揃えて、それから市民にもサービスする。そういう公共性も大学の図書館は必要ではないかと思うのです。

戸沢 その前に、ひとつ思うことがあるのですけれども、本学の図書館もかなり以前からコンピュータ等を導入して、データベース化とか検索その他たいへん努力されていい結果が出ていると思うのです。現在、情報化時代ということになりまして、機械一つあると、ボタン一つで本の頁が出てくる。だから図書館はいらぬのじゃないかというような、これは極端なことですけれども、“本のない図書館”というふうなことが、いかにもこの新しい時代に適応した図書館のあり方だといわれる。これは全く否定するわけではありませんけれども、やはり図書館には本があるのだと。その本が、場合によれば文化財級歴史遺産としての意義も持つ。博物館とはいいませんけれども、そういう意味合いが図書館にはあると思うのです。ですから、そういうことを特に大学の図書館は重要な性格として生かさなければいけないのではないかと。おそらく図書館長も、そういう全体の大きな

流れの中で“蔵書の個性化”というふうなものと結びつけて問題を提起されているのだらうと思うのですが、その点はどうなのでしょう。

後藤 本学の図書館のわりあい集まっているもの、これは偶然であるかもしれないが、大学の明治以降学問の流れでドイツ学が多いですよ。それで、経済関係でも、法律関係でも、歴史関係でも、ドイツのものが非常に多い。ドイツ関係の先生の話を知ると、日本でも有数なドイツ関係を集めているということを言われます。一昨年も「ボールド文庫」¹というコレクションを高いお金で買ったんです。いま資料を整理していますが、これによって、中世、近世のドイツの社会史がかなり見えてくる。貴重な図書を入れたなという感じがします。

そういう図書を使いながら、ドイツ史研究の成果をあげている教員もいますし、また一方で、例えば政経学部のある先生が『ユートピア論』を書いたんですが、この資料というのはアメリカから全部入れたんですが、それを図書館が手伝ってやって、中央公論から本を出したんです。そのことを今度は図書館の紀要を出す過程でいろいろ書いてもらったりしているんですが、図書館がそういう形で研究者に役立たせているんだということが見えてくるんですね。個人の力ではなかなかできないものを……。

ストックを核に蔵書を発展させるという意味では、日本で言うと、「蘆田文庫」²というのがあるのですが、この地図は見事なものです。最近も、今年になって江戸時代に日本で作られた中国の歴史地図の自筆本を、高かったんですけど入れたりして、系統的に地図を集めようとしています。ストックをとにかく利用していくということ。それが、この8月から相模原市で地図展³をやっていますが、5割ぐらいは明治の図書館から貸し出しているというのがあります。

戸沢 蘆田文庫は本学では公開したことがあるんですか。

後藤 去年、一昨年と、刑事博物館を借りて展示しています。

¹ドイツ、ヨーロッパ中世史・社会史研究の第一人者であるカール・ボーズル (Karl Bosl, 1908-1993) の旧蔵書。バイエルン、ボヘミア関係史料を中心に、図書約14,000冊、抜刷約6,000点からなる。

²日本地誌学の先駆者蘆田伊人 (あしだ・これと、1877-1960) の旧蔵書。古地図約1,500点、古地誌類約1,000冊からなる。

³絵図から地形図へー近代地形図の誕生と発展 相模原市立博物館、平成9年7月26日(土)～8月31日(日)

戸沢 だいぶ人気だったでしょうね。

後藤 そうですね。地図というのは、特にこの頃、阪神大震災があったりして、活断層の問題などで非常に関心が強いそうです。

それから、明治には文学部があるのですが、近代文学の資料も、かなり系統的に和泉分館で集めて、これも貴重なストックになっているということが言えます。しかし、まだまだ、例えば演劇とか、歌舞伎だとか、法学部のローライブラリーとか、こういうのを図書館がもうちょっと書誌学的に研究して、どういう資料があって、どう個性的であるか、その点検とPRですね、見えるようにする。この作業が必要でないか、やはり活用されなければいけない。活用されるには、ちゃんとあるという中身を示していくことも、図書館の役割としてあるのではないかと思います。

戸沢 最近の図書館の「紀要」等を見ても、館員の人たちが、そういう資料について書誌学的に本当にきちんとした研究の結果を幾つも発表されますし、図書館の機能として、ただたんに図書を集めてそれを見せるというのでない何か、これからつくられていくべきなんでしょうね。

後藤 今までの図書館運営を振り返ってみると、どうもあまり動きがなかった。これはちょっと活性化しなければいかんかなという形で、いろいろ政策を出しているのですけど。

戸沢 後藤館長はまだ短いですけど、短い間に、図書館は何か目的を持って動きだしているなという印象派は持っています。大いにがんばって頂きたいと思います。

後藤 図書館の活性化とか個性化もそうなんですが、職員、館員ですね。もう20年、30年のベテランがいますけど、これを生かさなかったのじゃないかという感じがします。ベテランですから、生き字引でいろいろ書誌学的に知っているわけです。それを書いてもらったり発表してもらったりすることで、みんなに知らせる。それが今までなかったというのは残念だったなという気がします。

それと若い職員ですね。これにやはりテーマを見つけて書誌学的に発表させていくと、彼らの研究にもなるし、それが学生や教職員の教育の支援態勢になっていく。そういう流動的な図書館の機能みたいなものをやれ

ば、2倍、3倍の職員の力が出てくるのじゃないかと思います。

戸沢 その点に関して、これだけ大きな、しかも実績を持った図書館を抱える明治大学で、図書館司書の教育、その講座がないのはどういうことかというのを、よく聞かれますけど、これはどうしてできなかったんだかね。

後藤 戦後、1950年代に「図書館学」という講座は1講座設けられました。それは都内でもはしりだったそうです。司書課程は今は慶應大学をはじめ多くの大学でありますけど、本学でもほとんど開設の直前まで準備が進みながら、人事や教学との関係が複雑にからんで、つぶれてしまったようです。

戸沢 そうすると、それは図書館の問題より学長の責任に係わる問題ですね。

後藤 だいぶ昔の話ですけれど。(笑)

戸沢 図書館そのものをさらにいろんな意味で発展させていくうえでも、そういう講座が大学の中にあると、相乗効果以上に役に立つと思いますので、ぜひこれから目標にすべき仕事かもしれませんね。

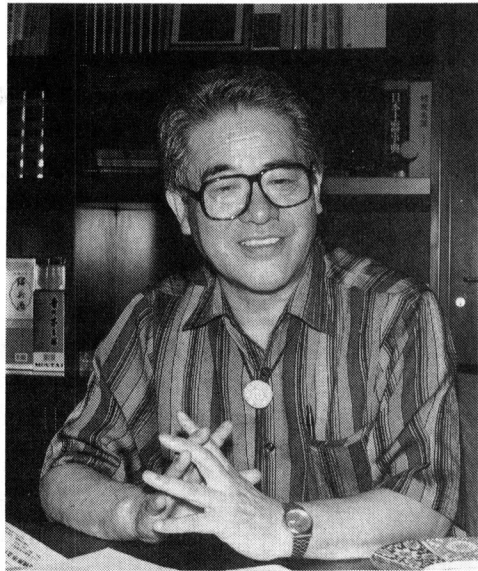
後藤 それは学長のもとでいま展開されている「教学基本計画会議」のプロジェクトの一つとしての「生涯教育」の中でも提案されていて、我々のほうでレポートしましたが、やはり社会教育の、いわゆる生涯教育のセンターになるのは図書館だと。そういう需要が非常に多くなるわけですから、大学の図書館司書が取れる資格講座はぜひ欲しいということで、いま下準備をしておりますけれど、実現させていきたいと思いますね。

3 蔵書の個性化に向けて

後藤 いよいよ本題になるのですが、図書館の予算枠が6億前後で決まっていますけれども、研究用も必要だし、学生の学習用も必要だし、雑誌も必要です。確かにもうあまり読まれないような雑誌もあるし、ほかの研究機関でやっているような雑誌とダブっているの、そういう雑誌の見直しとか情報の一元化というのをやっているんですが、どうも既存の予算の配

分や収集の仕方だけでは……。大学独自の図書を、これだけは社会の財産として100年、200年後にも残していくということが必要なんです、そのためにはわが明治大学固有の伝統みたいなもの、建学の理念といってもよいかもしれませんが、そうしたものを見すえながら、なおかつ21世紀に役立つような基礎的な資料を全国に発信できるような、そういう機能を持った個性化を1つか2つ持たせたいということを、私としてはやってみたいんです。

戸沢　いまおっしゃったのは図書費の見直しですよ。個性のある、特徴のある蔵書、あるいは大学の研究所のものに緊密にコミットできるような、そういう蔵書の方式ということについては、後藤館長に、この間の学部長会で、懇談会という形でしたけど問題提起をしていたいただいて、たいへんよかったですと思うのです。おそらくほかの学部長会のメンバーも、その問題は時間をかけて早く討議をしたい、正式な議論をしたいという雰囲気をもっていらっしゃるようです。それは学長の責任ですから、ぜひそういうふうにしたいと思



いますが、このことは図書費だけの問題ではなくて、本学は、図書費も含めて、いわば研究に関する費用というのはかなりの予算を組んで実行しているわけです。

こういうことを言うと叱られるかもしれませんが、とにかく特徴のある明治大学らしい研究、そういうものがなかなか見えてこないという批判

が前からあるんです。図書の問題と同じことで、総花的に平等にというのは、そういうやり方も大学の教育研究の最低の基礎を支えるためには絶対必要だろうと思うのですが、もう少し何か個性的な研究なり、図書館の場合についていえば本の集め方、こういうのをぜひ図書館長の言うように、組織的に、体系的にできるような仕組みをつくりたいものですね。

後藤 一軒の家でもそうだけど、家蔵だとか、俺のところには古い壺があるよとか、古文書があるよとか、そういうものというのは、その家族なら家族、あるいは村や地域にしても、アイデンティティーになるんですよ。それを大学でいえば、こういう蔵書が日本一あると。例えば地方史誌が非常にあるので、それを個性化のトップバッターにして、体系的に5年10年やってみようということが一つ考えられるのですが、そうすると次に、法律も実はあるんだとか、あるいは演劇も実はあるんだとか、文学もあるんだとか、それぞれの研究集団が競って個性化に向けて選書や収集をしなければならんというふうになるのではないかな。ただ思いつきとか、古本屋とか業者が持ってくるのを、予算消化のために何か買うというだけではなくて、そういうことの一つの突破口なり路線の引き方として、ひとつやってみたいなということを出しているんです。

戸沢 例として、地方史を大事にするということは、明治大学の建学の精神からいっても「権利・自由・独立・自治」、言い換えれば、いろんな意味を含めて「在野精神」、そういうふうなものが本学の一つの建学の理念でもあり、実際それで120年の歴史を築いてきたわけですから、研究のうえでも当然それぞれに関連した蔵書を充実する、特徴のある蔵書をつくるという意味でも「地方史」あるいは「地域史」といいたいでしょうか、そういうものに力点を置くということは、現実としてあり得ると思いますよね。

そう言うとは非常に偏ったような見方になると思いますけれども、何というんでしょうか、例えば法学部が裁判記録ですか、判例集ですか、ああいうのをかなり意欲的に集めて法学部資料センターを持っていますけれども、それを将来ローライブラリーという形で、もう少しきちんとした一つの体系をつくりたい、組織をつくりたいと、こういう大きな希望を持っているわけです。それだって、歴史そのものではありませんけれども、本来

ならばどこかへ埋もれてしまうようなね。実際に法律の歴史の中で生きているナマのものを意欲的に集めようという努力ですから、そういう意味では、刊行されたまちんとした本をそこに集めて、それが図書館になるのだというものとは違った、資料的な価値と特徴を持ち得ると思いますね。そういうようなことを各学部等々の研究の組織の中で意欲的に試みる。それを図書館がサポート、バックアップできる。こんなことができれば、学術情報センターという形で、これから発展する図書館の大きな役割にもなりますよね。

後藤 建学の精神は、まさに地方の地の塩になっていくという、明治大学のあの時代の精神としてあったわけです。その延長線上で、この1年、政府もやっている「地方の時代」「地方の推進」「地方分権」と、やっと地域という問題から国家を支えていくという、中央集権からではなくて下からだという発想が出てきて、これは総論賛成で各論が難しいということが出てますが、その動きは21世紀へ大きな流れになっていくだろうと思います。おそらく地方分権、地域の時代というのが時代の流れになっていくという感じのなかで、それを支える基礎文献、これはやはり“地方史誌”だろうという感じがします。

私は、この20年来、町づくりとか、村づくりとか、そういう形であちこちでお手伝いをしておりますが、もう20年前ですが、自分の生まれた村である信州の遠山で初めて「村史」をつくったんです。そして『遠山物語』を書いたり、常民大学という勉強会を開いて今年で20年になるのですが、その村史ができたことが、その後の村の活性化とか、過疎化対策とか、祭りの意味だとか、縄文作物を育てようとかいう形での発見の材料になっていったんです。また、そのあと岩手県の遠野市で、柳田国男の『遠野物語』を軸にして、これも今度「注釈」というのを筑摩書房から出すんですが⁴、遠野が単なる観光ではなくて、遠野の文化財であるということで、市長にご理解いただいて、研究所もつくっていただいて、新しい町づくりの核になりつつあります。そういう意味で、歴史を学ぶということが、アイデンティティーにもなるし、未来が見えてくる。そうでないと、思いつきや東京発信のみんなのものまねになってしまって、画一的な町づく

⁴後藤総一郎監修、遠野常民大学編著『注釈遠野物語』（筑摩書房、1997.8、A5版、406P）

りになってしまうんです。それではやはりだめだという意味で、21世紀は“地方の時代”だとすれば、その基礎作業としての資料としての「地域史」というのが明治大学にあるということ。そのネットワークをとにかくやって、発信できる。インターネットじゃないけど、何かそういうことで明治大学の地域史研究というのが、これは考古学、古代史、中近世史、近代とあるわけですが、それが活かせる可能性を追求できないか。

そこでもう一つ、これは図書館と考古学博物館と協力しながらお互いに資料を見せ合いましょうというお話をしているのですが、話に聞くと、東日本では資料は日本一集まっているそうですね。

戸沢 本学が今まではそうだったかもしれませんが。これも先輩の先生たちが、文献・報告書とかいろんな本があるんですけども、そういうものの収集を考古学博物館を中心として非常に精力的にやられた。最近はいろんな形で古い文献を集める機関が多くなりましたけど、つい10年くらい前までは、都内の有力な大学の考古学の専攻生はみんな明治大学へ考古学の本を見にきました。卒業論文を書く、修士論文を書くというときでも、同僚の先生から紹介状が我々のところに来まして、それで自由に公開して見せていたということです。そういう点では、非常に充実した内容の文献を備えているということは言っていると思います。

それと、幸いに考古学研究室の場合は、発掘調査等も学会の中心的な存在としてやってましたから、そういう部分でのいろいろな情報や資料も、考古学博物館を中心として非常に集中していた。こういうことはあります。ぜひそういう部分を、むしろ大学の一つの特徴のあるものとして伸ばしていくような、これはもちろん考古学だけではありませんけれども、そういうことを大いにみんなで考えたらいいのだろうと思います。

後藤 これを突破口にしながら地域史の個性化をはかっていきたいと思っています。体系的に集めようという形で、図書館の飯沢さんたちに全部インデックスを調べてもらったんですが、都道府県史と県庁所在地の市史は100%あります。他の市史や町史レベルになると8割ぐらいですが。

戸沢 それでもたいしたものですね。



中央図書館書庫に並ぶ地方史誌

後藤 特別区の区史とか村史になると、まだ60%ぐらいかな。それでもよく集まっているなという感じがします。これをぜひ生かしていきたいと思っています。

戸沢 100%にして欲しいですね。

後藤 そうです。そういう形で必ず入れるという予算化をしていくという、個性化の理念型みたいなものを一つ立てれば、たとえ限られた予算であつても活きた使い方ができるのではないかなど。その目録を作つて全国の市町村に発信していく。それをひとつやってみたい。

収集し、それが見えるようにして、全国発信しながら役立てていくということが一つありますが、もう一つ、歴史を縦軸にしなが、ただ歴史だけでなく、例えばいま成田で社会人大学やってますね。その場合に、成田でなくてもいいんですが、講義するだけのではなくて、歴史を軸にしなが、例えば建築関係の活断層の問題とか、地質学の問題とか、農学の問題とか、あるいは信仰の問題とか、そういうように明治大学の7学部が構造的に協力しあつて地域史を作るような、何かそういう試験的なモデ

ル、それをひとつやってみたらどうかなという感じがします。

戸沢 後藤さんも僕も、もともと歴史の分野の仕事をしていますから、「地域史」と、いうふうにすぐ言っちゃうわけです。僕も地域を大事にするという研究をずっと考古学の上でやってきたつもりですが、僕は「地域史」とあえて言わないで「地域研究」というふに言っているんです。いま後藤さんおっしゃったように、地域を単位とした地域の社会なり歴史なり文化なりを構造的におさえるという研究が、あらゆる学問分野を横断的に動員して一つの明治大学の学問として打ち出せる、そういうものをずっと本学は蓄積していると思います。

後藤 そういう意味では、3研究所ありますけど、むしろこういうのを土台にしながら「地域研究所」みたいな、そういうのができるといいんですよ。

戸沢 そうですね。例えば、このところ国際交流がひとつの転機を迎えたこと。今までそれなりの努力をしてきたのですけれども、もう一つきちんとした目標を持った国際交流をしようということで考えられるのは、やはりアジア地域とか、そういうわば“地域”を中心にした国際交流、あるいはその中の研究プロジェクト、「中国研究」、そういうものに皆さん関心が集まっていますし、日本の中の狭いところだけでなく、地球上全部を含めたトータルな意味でも、やはり地域を対象とした研究の体系というのが、明治大学の学問の一つの特徴となる。こういう状況だと僕は思っています。

後藤 蔵書の個性化のなかで「地域史」というようなことを考えていますが、それは日本だけでないのです。うちの大学には中国の地誌も多いんです。それを一つのストックというか、ベースにしながら、韓国、朝鮮、さらにアジア全域に広げていく。どっちにしても、中国、韓国の影響度というのは歴史の中で古いわけですし、百年の交流史だけでなくね。そういう意味でアジアというのを学問的に理解しながら「平和」という問題を考えていくということ……。学問研究というのは、平和のためとか、福祉のためとか、そういうことがないとね。ただ研究のための研究ということではなくて、そういうように枠組みを決めて体系立てていけば、収

書や選書の仕方も変わってくるのではないか。それを継続していきたい。

戸沢 そういう構想というのは、21世紀に向かって明治大学がどうなるのかというときに、生涯教育とかいろいろな言い方がありますけれども、地域や社会と密着して新しいアカデミニズムを作っていこうという構想と、きつとつながっていると思います。

後藤 図書館行政というのは、私が本が好きだということもあるし、思想史、特に地域史とかやっているから、そう思うのですが、学問や歴史を何に役立てるかという、その哲学がないとだめですね。ただ好事家的にいい本を集めるとかコレクターだけではだめなんですよ。

戸沢 今、いろいろ将来構想みたいなことを言いましたけれども、やはり大学というところは、それが一つの形としてみえるような部分をつくる。それをさらにふくらませて発展して一つの創造的な体系にしていく。そういう意味では図書館などは、まずそういう役割を担える。そして実際に形として示すことが一番可能な部分だということで、ぜひ努力をしていたらと思いますし、そうしなければいかんと思います。

後藤 教育研究のストックが集まっているセンターだということであれば、そういうものがあるか、どういうものを集めようとしているか、それをどう活用しているかということが、図書館が動いていれば、学生や先生たちに、まずは元気や希望の方向性を与えていくと思うし、それがエンジンになって、俺もこういう研究やろうかとか、そういう形が出てくればいいかなという感じがするんです。

戸沢 このごろの図書館は「紀要」を出されたりしてね。

後藤 スタッフ研修をやったりして、すばらしい研究レポートを出してくれるので、それはありがたいと思います。今までそれが生かせなかったというは残念だったと思いますけれども。

4 図書費の見直し

後藤 個性化するためには、予算を今までどおりの20年来の形どおりの配分ではどうもまずい。そこで、学部に配分されている図書費を、もう少し活用できないかということで、この間、学部長会でもご説明をして、少しずつご理解をいただこうというこ



とを進めつつあります。これは一ぺんにはいかないだろうと思うのですが、しかし、今までの実績と図書館の理念みたいなものをお話すれば、それじゃ少し配分を図書館に回そうかというようになるのではないかと考えているのですが、無理はするつもりはないです。大学で予算をどんどん増やしてくれれば楽な話だけれども、ただ、そうした姿勢を教員のなかでつくっていかないとだめだと思うのです。

戸沢 なるべく早いうちに、少なくとも学部長会メンバーの中で、このあいだ提起された問題をみんなで自由に討論してみたいと思っております。

後藤 差し当たっては、学長にも言われたし、学長スタッフ研修でも政策を出して、それから今後、図書委員を通じて学部教授会でも検討してもらおうと思っています。その反応を見ながら、また学部長の先生たちにも懇談してもらって、来年度の予算には間に合わないかもしれないけど、その次には生かせるような、そんなこともやってみようかなと思っていますのです。

戸沢 先ほど、ホームページとか情報化の問題について若干意見めいたことも言いましたけれども、しかし、それは時代の流れとして当然そういうものがますます大きくなっていくわけです。けれども、そういうものとい

まおっしゃった意味のことを含めて、図書館行政といいますか、図書館の充実の仕方ですね、それを組み合わせて考えて問題を提起するということは、学内のある一定のコンセンサスを得るのに必要なことだと思います。

後藤 情報機器というのは道具ですが、検索にしても、外からもらったり送ったりするにしても、これは必要なんですよね。だから、その機能をどう生かしていくか。それが全部電子本化するかという、そうではないですね。元はやはり紙で活字なんですよね。それが映像化されたりということはもちろんありますが、おそらく永遠に変わらないだろう。だから、情報化に全部頼ってしまうと、これはまずい。そこで図書は図書としてある、映像は機能として役立てていく、という役割だけは担ってやっていきたいというのはありますね。

戸沢 蔵書にしても、どうしてもうちで買わなければいけないものにはこれだけ金をかけるけど、インターネットその他で間に合う部分もたくさんあるんじゃないか。そういう計算上のこともあるんじゃないかと思えますね。

後藤 例えば1億なら1億、5,000万なら5,000万という古書が出てきた。そのときに、うちでは買わないけれども、例えば東大で買う、あるいは早稲田で買う。それを早稲田から借りる。つい最近も、立教大学の図書館長がみえて、相互交流したいと。あそこは西洋文学やクリスチャン関係が多いですね。ところが、環境の問題などをやろうとしているのですが、農学部がないから蔵書がないというわけです。ぜひ交流して、学生にも教職員にも貸し出してもらいたい。うちもやりますからと。それは関西が非常に多いんです。例えば、大阪市立大学と同志社大学と立命館大学がそうです。朝日新聞の原紙は大阪市立大学が全部集め、立命館大学は日経新聞を全部集め、それで相互交流するんです。そういう形で交流をしていかないと、一つの大学で全部というのは、とても予算リストラ化の折りたいへんだし、いわば保存書庫も少ないわけですから。という意味で、相互交流の図書館機能の果たし方というのが、どんどん増えるのかなと。その突破口が立教大学が一つ来たので、これはまただんだん増えるかなという感じがしております。ただ、それはどのレベルまでやるか。受益者負担の図書館

ですから、全部開いていいかどうかという問題があるので、これはフォーマルな形でいずれ学長のほうにも相談しなければいかんし、部長会でもしなければいかんということなのですが、流れとしてはそういう感じがあります。

戸沢 A地区の今度の新しい建設のなかで構想されていることは、かなり大規模にそういうものを取り入れる、あるいは取り入れられるということです。ですので、そういう部分はその部分として有効に使う。しかし、図書館として、冒頭に言ったような何か大学の特徴を出す、哲学を持つという部分については、十分に金を使えるようなシステムをぜひ構築したほうがいいと思います。

5 若者の読書離れ

戸沢 今、学生や若い人の読書離れ、これは図書館あたりでデータとか調査の結果というのは何かありますか。

後藤 図書館の職員に去年あたり聞いたのは、和泉分館の閲覧室が普通的时候はがらがらだと。で、試験になるといっぱいになるということが、しばしば言われています。但し、3、4年になってゼミで卒論等があります。そうすると一気に駿河台の図書館は満杯になるんです。そういう意味では、特に1年生に本を読んでもらいたいというのがあって、今年の秋に、初めての試みですが「著者と語る」という講演会みたいのをやって、100人とか200人の学生を、まずは図書館へ呼び込んで、そして関心を持たせていこうかなということをお話しているんですが。情けない話ですね。

若者が本を読まないということはつまり、今の高度成長をなし遂げた飽食時代、そして秩序社会の中では、ハングリーがないこととつながっているわけです。ハングリーがあれば、何か好きなのところから小説でも歴史でも読んでということがありますが、そういうことが体験や認識としてない。つまり、受験勉強をやって、記号で全部覚えていけばレールに乗って社会で生きられるというふうになっていますから。受験勉強は昔もありましたよね。あったけれども、今のようきれいにレールに乗るといったことはないわけです。そういう意味では、知的な飢えとか物に対する飢え

がないから、だからカタログ雑誌とかハウトゥものは買うけれど、悩んだり、考えたりする哲学とか評論は読まないんですよ。学問というのは、問いて思うことだけど、ところが問いがありません。情報やテレビや人の言うことを聞いて、それで自分の知識を形勢していく、それがテレビ情報化時代の自己疎外でもあるんですね、考える力を失うという意味では。そこをもう一回自分で考える力をつけさせるためには、やはり本を読ませることをしなければだめなんです。

戸沢 本を読みたいなという気持ちにさせるにはどうしたいですかね。

後藤 それは今、文部省が、単なる「読みなさい」とか何とかいうしつけ教育だけではなくて、「命」というのは大事なんだということを、あるいは「思いやり」ということが大事なんだということを、改めて中教審が言わざるを得ない状況でしょ。それはもとを言えば政治の責任かもしれないし、構造的な責任もあるわけなんだけど。

この間、ある雑誌で「大学の改革論」なんていうのをしゃべらせたんだけど、「大学に未来ありますか」ときかれて、「俺はあまり期待はしない。そういう意味では半ば絶望している。しかし、辞めるまでは一縷の希望を持って自分の情熱を傾けて学生に語るしかない。尻を叩くしかない。百人のうち一人や二人は学生いいのいますよ。だから歴史をつないでいくんだろう。そういう経験や体験があるから頑張りたい。全部さじを投げるのではない。」ということをやったけど、しかし、個人の努力だけではどうしようもないことがあるわけです。だから、個人の實力が実るような制度として大学全体の緊張関係をつくっていくということが必要なんですよ。

いずれにしても図書館情勢は、本を読んでもらうことが一番大事なんだけど。これを何とか興味でいいから、まず向けさせて、本を読むことの楽しみみたいなもの、そこから尻を叩かなければしょうがないのじゃないか。やはり教育期間だから、向かってこなかったら、こっちで手を差し延べなければ、過渡的ではあるけれどもしょうがないんですね。そんなことを図書館行政としては、考えなければいかなんと思っているんですけどね。

戸沢 いま教育研究基本計画会議の全学教育課程検討プロジェクト、要するにカリキュラムのプロジェクトで「骨太」「簡素化」と言っています。簡

素化はどうでもいいんだけど“骨太のカリキュラム”を作るというのはどういことかというのでいろいろ議論があるのですが、委員会はどういう報告書を出してくるかわかりませんが、僕など本当に、大学の教育というのは、もっと骨太で自由がある、というものをつくったほうがいいと思っているんです。これは決してリストラとかそういう意味ではなくてね。結局、いろんなものを120、130という単位で平均的に知識として、そういうもので教えようとするから、消化不良になりかねない。もっと自分のもとのものは何かということ、例えばゼミを充実するというような形で、先生たちと自由にいろいろ会話等もしながらついでに。それで戸沢の言うことだけじゃちょっと偏っているから、こういう本を読んでもるかとか、こういう講義を聴きに行ってみるかとか、何かそういうことが大学の教育の体系としてうまくできれば、だいぶ変わってくるとおもうのです。

後藤 そうですよ。しかしこれがなかなか難しい。

戸沢 学長としてはあまり宣伝はできないけど、僕など学生時代には、教室の授業に毎日出たことなんていうのは、あまり記憶ないね。(笑)

後藤 私もそうでしたね。ゼミは橋川さんだったから、ゼミで魂をつくられたというのがありますね。

戸沢 ゼミは出たね。あとは「喫茶店考古学」ですよ。喫茶店に行ってワーワーみんなと話し合っ、そうすると誰かが、何だかしらないすげえ本を読んで、あいつはよく知ってやがる、しゃくにさわると思うと、自分であわてて本を買ったり、そのときに図書館にお世話になったこともあるかもしれない。ふだんあまり読まないような、例えば、僕は考古学だけれども、そういうなかで誰か哲学者の話が出てきてどうだということ、別れて帰りがけくらいにでも本を手に入れて、家に行って夢中で読まなきゃというような、そういう繰り返しだったような気がするね。

そういう勉強の仕方というのは楽しかったですよ。

後藤 どうありがとうございました。

1997年8月5日 於：学長執務室

「図書の譜」第2号正誤表

頁(行)	誤	正
18(14)	らせた	らせられた
19(下2)	どうありがとう	どうもありがとう